

市指定天然記念物「大久保の大ケヤキ」樹勢維持事業

樹勢盛んな「大久保の大ケヤキ」は、神明社（新潟市北区大久保50）の境内にあります。北区では「高森の大ケヤキ」に次ぐ大きさで、推定樹齢300年、目通り5.9m、高さは約25mです。堂々とした枝ぶりの大ケヤキですが、このたび、枯れ枝が数か所発見され、落下などの危険性もあることから、平成26年3月に剪定作業を実施しました。

作業に当たっては天然記念物として良好な樹勢を維持するため、樹木医の指導のもと慎重に行われました。

なお、事業経費297,150円のうち、50%にあたる148,000円を新潟市が補助し、管理者の大久保自治会は149,150円を負担しました。



大久保の大ケヤキ



枯れ枝除去工事



枯れ枝除去工事

濁川公園内の石碑「濁川清浄処」の説明板設置

地元から由来を説明した看板を設置してほしいとの要望があり、北区役所建設課と協議し、説明文案は北区郷土博物館が担当し、経費126,000円は北区建設課が負担して設置しました。



濁川公園内の石碑

「濁川清浄処」

この石碑は、現在の佐賀県小城市に生まれ、近代日本の書道史に大きな足跡を残した中林梧竹（1827-1913）の揮毫によります。

1895年（明治28年）、新潟市を訪れていた中林梧竹は、偶然にも、濁川の大地主・眞嶋桂次郎（1862-1938）と新潟市の同じ旅館に宿泊しました。ここから書家・梧竹と独学で書をたしなんでいた桂次郎との深い交流が始まります。同年9月28日付けの新潟新聞によれば、梧竹は桂次郎の招聘により、眞嶋宅に赴くとあります。この時期の滞在期間は定かではありませんが、眞嶋家の言い伝えでは、3箇月間ほど滞在し、書三昧であったと言われています。

中林梧竹は滞在中に、この地は濁川というが、濁りのない清らかな処だと「濁川清浄処」を揮毫していますが、それは桂次郎の願いでもありました。また梧竹は自らの書について、今は無理でも100年後には理解されるだろう、と言い残しました。そこで眞嶋家では、梧竹が一般的に理解されるまで待ちました。1998年（平成10年）、眞嶋桂次郎の孫にあたる眞嶋明（1923-2009）は、100年が過ぎたとし、中林梧竹の書を刻んだ石碑を建立しました。